

北海道熊研究会」Hokkaido Bear Research Association

ご意見ご連絡は本紙送信 email ではなく、下記の email へお願い致

します

e-mail: kadosaki@pop21.odn.ne.jp

＜北海道熊研究会 会報＞ 第95号 2020年5月 31日

北海道熊研究会事務局 北海道野生動物研究所内(Tel. 011-892-1057)

代表 門崎 允昭

事務局長 Peter Nichols ピーターニコルス氏

幹事長 藤田 弘志 氏

既報会報の1～93号はWebsiteに「北海道野生動物研究所」と入力しご覧下さい

北海道熊研究会」Hokkaido Bear Research Association の活動目的

熊の実像について調査研究し、熊による人畜及びその他経済的被害を予防しつつ、人と熊が棲み分けた状態で共存を図り、狩猟以外では熊を殺さない社会の形成を図るための提言と啓発活動を行う。この考えの根底は、この大地は総ての生き物の共有物であり、生物間での食物連鎖の宿命と疾病原因生物以外については、この地球上に生を受けたものは生有る限りお互いの存在を容認しようと言う生物倫理(生物の一員として人が為すべき正しき道)に基づく理念による。

＜皆様にお知らせ＞

先月の、4月16日から、北海道新聞社から、拙著の「ヒグマ大全」が、販売されていますが、その書に対する私の所感の一端が、記事として、5月の29日の夕刊紙の全道版に掲載されました。

私は取材に当たり、以下の事を、強調しました。

- ① 熊の行動には、必ず目的と理由がある。行動には必ず行動規範がある。
- ② 北海道では、1965年を期に、熊の生息圏と人の居住圏が分離したが、以来今日まで、人の居住圏に出て来た熊が人を襲った事は皆無である事。
- ③ それに対し、人が熊の生息圏に行き、不用意な行動をすると、熊は人を襲う事が有る事。
- ④ ホイッスルと鉦を、必ず携帯する事。熊は全身に痛覚神経があるから、鉦で熊の身体の何処かを、叩いても、痛いと感じれば、襲うのを止め、離れて行く。
- ⑤ 山地で見る熊の成獣の顔相と挙動は畏怖の念、そして更に畏敬の念を禁じ得ない霊力がある。研究者気取りをし、検証調査をしていない連中の戯言に、

惑わされて、熊を殺しまくっている行政を変えなくては、ならない。

<5月29日の北海道新聞 夕刊紙の全道版に掲載された門崎允昭の記事>

北海道新聞

ヒグマ研究50年 対処法一冊に

「街中に出没しても襲われない」

半世紀にわたり道内のヒグマを研究し、北海道野生動物研究所(札幌市厚別区)を主宰する門崎允昭さん(81)が、その生態や出合った時の対処法を紹介する著書「ヒグマ大全」(北海道新聞社)を出版した。近年の市街地での出沒事例を数多く収録し、出沒した「目的と理由」を知ればヒグマとのトラブルを避ける方策は見いだせるとし、無用な駆除を減らすよう訴えている。(内山岳志)

門崎さんは帯広出身で、帯広畜産大学を卒業後、北海道庁に勤務した。1970年からヒグマの調査を始めた。道内の研究者の中では、熊に強く反対する保藤派の代表格で、山中での生態の観察などフィールドワークを積極的に行い、人身事故があれは被害者に取材して対策の検討を進めてきた。

著書では、クマが住宅地や農地など人里に近づく理由について「母離れをした若クマが自分の生活圏として

70、2016年に道内で起きたヒグマによる人身事故89件については、猟師が33人、山菜採りや釣りなどで山中に入った一般人が1・7倍の56人だったと指摘。山菜採りなどができる場所はクマに遭遇する可能性があることを、「自費」すべきだとし、クマを遠ざけるための鳴り物の携帯を呼び掛け、襲われた時は「ナタ」などで反撃することも有効だと指摘した。

さらに「ヒグマがする場所は、北海道本来の自然

50年の研究成果をまとめた著書「ヒグマ大全」(5冊)に、山中でヒグマに出合った際の対処法を詳しく解説している。ヒグマが人を襲った場合、逃げ出すのではなく、静かに身を固め、目を閉じて待つことが重要だと述べている。

「静かに身を固め、目を閉じて待つ」とは、ヒグマが人を襲った場合、逃げ出すのではなく、静かに身を固め、目を閉じて待つことが重要だと述べている。

「静かに身を固め、目を閉じて待つ」とは、ヒグマが人を襲った場合、逃げ出すのではなく、静かに身を固め、目を閉じて待つことが重要だと述べている。